

奨学金と私の人生の転換

幸い、大学一年生の間に借金を完済することができた。そこで、二年生になつてから、リラックスして勉強できるようになつた。その年度の平均成績は、学年以上六位以内に入つたことから、専修大学第一種B奨学生(二年間の授業料免除)および第三種A奨学生(毎月の奨学金一万円)に選ばれた。また、大学の推薦で国際文化交流財団(石坂財団)の奨学生に応募し、運よく書類審査をパスして石坂財団の奨学生にも採用された。さらに、家賃が二万円と安く、三年間住むこ



2007年無錫市訪問

とができる神奈川県国際学生会館の厳しい書類審査と面接にも合格し、その寮生になつた。

三年生になつてから、石坂財団からの奨学金のお陰で、飲食店のアルバイトをやめて、公民館の市民サークルの中国語講師だけにしたので、以前より勉強する時間を増やすことができた。また、国際学生会館における学生同士の交流は友好的で、館長や職員も穏やかな方でかつ会館の周辺も静かなので、勉強にとっても適した環境であつたと思う。したがって、経済的のみならず、精神的にもゆとりが出てきて、以前より落ち着いていた気分で勉強できるようになつた。これはその後の学習成果に表れた。学部三年目の勉強を終わったときに、卒業に必要な一般教養および専門科目の単位を修得し、残りは演習科目(ゼミ)および卒業論文だけであつた。これによつて、四年生に入つてから大学院受験勉強の時間を確保することができた。

とにした。宮本先生には専門科目の指導のみならず、大学院進学の研究計画書の添削などもしていただいた。さらに、四年生になつてから宮本先生自ら「ゼミを休んでもいい」といわれたので、大学院受験勉強により専念することができた。大学院受験の結果、まず、一九九四年の後半に他の国立大学大学院に合格した。その翌年一月に落ち着いた気分で一橋大学大学院の入試を受けることができ、無事に合格できた。

一九九五年四月に一橋大学大学院に入つてからは、ずっと寺西重郎先生のもとで学んだ。寺西先生から厳しいご指導・ご鞭撻をいただいたお陰で、一橋大学で勉強する間に日本経済学会などで学術論文を数回発表し、二本の査読論文も公表した。そして、二〇〇三年一月に専修大学から専任講師の内定をもらうとともに博士學位論文も完成した。同年四月に博士号を持って専修大学経営学部に赴任した。

振り返れば、石坂財団の奨学金のお陰で大学院受験勉強の時間が確保でき、それが私の人生の転換期に非常に役立った。いまは、大学院で身に付けたスキルや専門的知識を活かして中国の民営企業などの研究や大学の教育に努めている。

奨学金と私の人生

国際文化教育交流財団一九九三年度奨学生。中国江蘇省揚州市出身。二〇〇〇年三月一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位修得、二〇〇三年三月同大学博士号(経済学)取得。四月専修大学に入職。

専修大学経営学部教授

李 建平
り けんぺい

人生初めての苦渋の選択

複雑な日本留学の手続きを終えてから一年以上待ち、一九八九年九月末にやっと就学ビザを取得し、十月に来日することができた。当初、日本留学の目的は、地理的に近い世界第二の経済大国で経済学の博士号を取るという夢を叶えることであつた。しかし、当時の日本の就学ビザには二年間という期限がついていたので、来日して二年以内に大学入試に合格できないと帰国するしかない。したがって、日本語学校で半年ほど勉強してから、万全な大学進学対策を立てるために、日本語学校の進学相談担当者とは相談した結果、先に東京都にある私立大学を受験し、大学入学許可を確保したうえで、さらに志望の国立大学にチャレンジするという対策に決めた。

それから、一九九〇年十二月に専修大学経済学部の入試を受け、一カ月ほどし

て可否通知書が届いた。その封筒を開けて「合格」という文字をみた瞬間に、どんなに喜んだかは言葉では表現できない。「よかつたぞ、これで大学入学許可を確保できる」と一安心した。しかし、しばらくするとその喜びは、徐々に悲喜こもごもの気持ちに変わっていった。このような心境の変化は主に当時の自分の経済的状况によるものであつた。中国共産党地方幹部であつた父親は、文化大革命中に批判され左遷先の農村で病死した。母親は、ずっと無職で主に政府からの生活保護で生活しているので、私に仕送りをする能力がない。当時自分がアルバイトで稼いだお金は大学入学手続き期間(一週間)に払うべき学費の三分の一しかなかった。残りは在日の親戚から借りざるを得なかつた。しかし、受験料をすでに支払つた某国立大学の試験日まであと一カ月あつたのである。当時の入学手続きの規定により一度支払つた学費は、

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一八三名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七七カ国五二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

どのような理由があつても返済しないということがある。学費を支払わないこと、大事な大学入学許可を喪失してしまうことになる。しかし、借金をしてその学費を納めたら、その後は早めに返済するため、多くの時間をアルバイトに費やし、受験勉強の時間が減ってしまうとともに、大きな負債を抱える債務者として自分は難関大学にチャレンジする気持ちになれないであらうと思つた。正直なところ、当時、自分は専大入学許可を放棄する勇気がなかつた。というのは、志望した大学に一〇〇%受かる自信がなかつたからである。どうすればよいか、私の人生においてはじめて苦渋の選択に迫られた。三日間悩んだ揚げ句、借金をしてその学費を納め、大学入学式までの二カ月間はアルバイトに専念することにした。その決定には経済的理由のほかに、将来いずれは大学院に進学するため、専修大学の四年間で自分の経済力と学力をつけてから難関大学をねらえばよいと心に決めたことがある。